

【日本の大学】第9 2回—岩手大学：地域に頼られ、尊敬される大学に

岩手大学は、本州の東北地方北部、岩手県の県庁所在地盛岡市に本部とキャンパスを構える国立大学である。明治時代の初期 1876 年に設立された盛岡師範学校を起源とし、1949 年に設置された。人口 30 万人の市街地にありながら、緑に囲まれた広大な自然公園を思わせるキャンパスに、人文社会科学部、教育学部、理工学部、農学部の 4 学部と、五つの大学院研究科、教育研究支援設備が集まっている。

理念として、「真理を探究する教育研究の場として、学術文化を創造しつつ、幅広く深い教養と高い専門性を備えた人材を育成することを目指すことで、地域社会の文化向上と国際社会の発展に貢献する」ことを掲げている。また、10 年後を見据えた「岩手大学ビジョン 2030」では、よりよい未来を創造する「地域の知の府」「知識創造の場」として、地域に頼られ、尊敬され、愛される大学となること、そのための行動規範として「共考と協創（共に考え、協力して創る）」を謳っている。



正門

以下、岩手大学のホームページなどから、大学の歴史や現況をみていこう。

1949 年に誕生した岩手大学は学芸学部、農学部、工学部の 3 学部でスタートした。学芸

学部につながったのは、盛岡師範学校からの流れである。盛岡師範学校は、岩手県立師範学校、公立岩手師範学校、岩手県尋常師範学校、岩手県師範学校（女子は岩手県女子師範学校）と次々に名称が改まり、1885年には岩手師範学校となった。もう一つの流れである岩手県青年師範学校とともに、岩手大学設立時に学芸学部となった。

学芸学部は、1951年に4年課程の小・中学校教員養成課程（甲類）と2年課程の小・中学校教員養成課程（乙類）を置いたほか、特別教科（美術・工芸）教員養成課程の設置（1955年）などを実施。1966年には、学芸学部は教育学部と改称された。その後は、養護学校教員養成課程の増設（1967年）、大学院教育学研究科（修士課程）の設置（1995年）などを行った。学部を大幅に改組したのは2016年である。学校教育教員養成課程に一本化し、その中に、小学校、中学校、理数、特別支援の4教育コースに再編した。



ものづくり研究棟

日本初の官立高等農林学校の流れ

農学部は、1902年に設立された盛岡高等農林学校がその前身である。当時の東北地方は、度重なる冷害と凶作に見舞われ、農民や農村は疲弊しきっており、冷害を克服し、食料の安定供給を実現するため、農業振興と技術革新、指導者の育成が急務であった。そうした要請に応える形で同校は設立され、当初、農学科、林学科、獣医学科の3学科であった。その後、

農芸化学科、農業土木科が追加された。

盛岡高等農林学校は、日本初の官立の高等農林学校として有数の歴史と伝統を持っている。ビタミンの発見で署名な鈴木梅太郎博士や、東北地方の冷害の原因となる「ヤマセ」を研究した関豊太郎博士など錚々たる教授が教鞭をとり、多くの研究業績を上げ、多くの優れた人材を輩出している。岩手県出身の詩人、童話作家であり、日本人なら誰でも知っている名作をいくつも書いた宮沢賢治は、盛岡高等農林学校の出身である。

盛岡高等農林学校は、第二次大戦（太平洋戦争）終了後の1949年には、岩手大学農学部となった。その後、組織改正、増設などが実施され、1991年の時点で、それまでの6学科（農学科、農芸学科、林学科、畜産学科、農業土木学科、農業機械学科）を3学科（農林生産学科、応用生物学科、農業生産環境工学科）に改組した。さらに、2000年、2007年にも組織改正が行われた。2007年の改組では、3学科を5課程（農学生命課程、応用生物化学課程、共生環境課程、動物科学課程、獣医学課程）に改変した。2012年には、獣医学課程を、東京農工大学とともに、2大学の共同獣医学科に改組。2016年には、現在の6学科（植物生命科学科、応用生物化学科、森林科学科、食料生産環境学科、動物科学科、共同獣医学科）に変更されている。



農学部附属農業教育資料館ライトアップ

このうち、食料生産環境学科は、グローバルな食料需給の視点を通して、地域の特色ある農・水産業を持続的に創生するための教育・研究を行っている。学問の対象は、近年の農水産業における諸課題である「グローバル化」「人口の減少・高齢化」「災害に強い地域づくり」「生産技術の高度化や保存・加工技術」など広範・多岐に渡っており、農村地域デザイン学、食産業システム学、水産システム学の3コースからなっている。

工学部は当初、機械、電気、鉱山、金属の4学科からスタートし、その後、応用化学科や機械工学第二学科の設置、鉱山工学科を資源開発工学科に改称、電子工学科の設置、土木工学科、情報工学科など、学科の増設・改称などが次々に実施された。2009年には、5学科（応用化学・生命、マテリアル、電気電子・情報システム、機械システム、社会環境）に再編された。理工学部となったのは、2016年のことである。その際、化学・生命理工学科、物理・材料理工学科、システム創成工学科の3学科に改組されている。大学院（博士課程）もそれに準じて、2019年に3専攻（自然・応用科学専攻、システム創成工学専攻、デザイン・メディア工学専攻）に改組されている。



釜石キャンパス

総合教育重視の伝統

人文社会科学部は、1966年に設置された教養部を発展、改組して1977年に創設された。一般教養教育の重視という大学の特色をうち出す中で実現したもので、現代社会の諸問題を総合的観点から理解する能力と、人間・文化・社会・環境に関する専門的知識・能力を有し、地域社会及び国際社会に実践を通して貢献できる人材の養成を目的としている。

当初、人文社会科学科（地域文化コース、社会科学コース）1学科（学生定員200名）の体制でスタートしたが、1990年には、大学院の人文社会科学研究科（修士課程）も設置された。その後、環境情報科学コースの増設（1993年）があり、2000年には、学部を課程制に改組し、人間科学課程（人間情報科学コース、行動科学コース）、国際文化課程（文化システムコース、アジア文化コース、欧米言語文化コース）、法学・経済課程（法学コース、経済コース）、環境化学課程（環境科学コース）の4課程に改めた。

現在、人文社会学部は2016年に人間文化と地域政策の2課程、14プログラムの体制に改編されている。人間文化課程のプログラムは、行動科学、スポーツ科学、現代文化、異文化間コミュニティ、歴史、芸術文化、英語圏文化、ヨーロッパ語圏文化、アジア圏文化の9プログラム。地域政策過程には、政策法務、企業法務、地域社会経済、地域社会連携、環境共生の5プログラムがある。



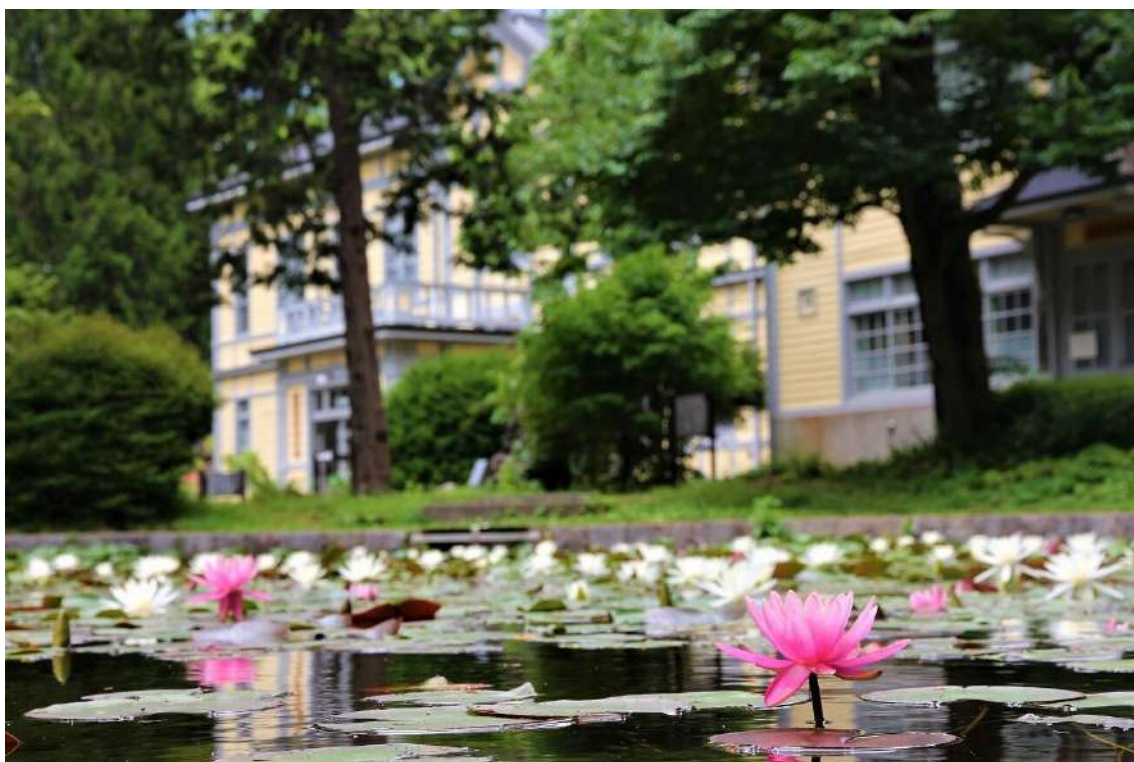
上田キャンパス

地域の特色活かす研究センター

大学では、学部、大学院と並んで、特色のある研究センターを持っている。地域防災研究センター、平泉文化研究センター、宮沢賢治いわて学センターなどである。

地域防災センターは当初、工学部の付属組織として設置されたが、2011年の東日本大震災の翌年に大学の全学組織として再構成された。これを機に、自然災害解析部門、防災まちづくり部門および災害文化部門の3部門の構成に改め、自然災害のメカニズムの解明とハード対策など、単なる復興復旧にとどまらず、災害に強く、活力あるまちづくりや、災害の様々なフェーズに対応できる人材づくりを目指している。

平泉文化研究センターは、世界遺産である「平泉」について、歴史学・考古学及び理化学分析などの観点から総合的に学術的研究を推進している。仏国土（浄土）の理想郷として創出された平泉庭園文化を中心に、その意義を総合的に解明することを目標としている。県教育委員会、平泉町教育委員会、岩手県内に拠点を置く大学で構成するいわて高等教育コンソーシアム、海外の大学、文化庁、奈良文化財研究所などと連携を図りながら、平泉文化の研究を国際的・学際的な観点で進めている。



北水の池

宮沢賢治いわて学センターは、岩手大学内外で、地道に積み重ねられてきた宮沢賢治についての研究・教育・普及活動を継承しながら、さらに、賢治に限らず視野を地元・岩手に根

差したテーマへと広げ、その成果をグローバルに発信することを目的に 2019 年 4 月に設立された。これまで、20 数回に上る研究会を開催し、大学を挙げて「賢治研究」「いわて学」の成果を発表している。

大学では、国際戦略、国際交流を推進するため、「国際連携戦略」を策定、2014 年には、国際戦略推進委員会を設置、具体的なアクションプランの企画・立案・情報収集や各種調整などを担う国際連携室を設置した。国際交流を具体的に進めるために、海外の大学教授に「グローバルフェロー」の称号を授与したり、国際化の支援、サポートを行う「支援コーディネータ」を設けたりしている。海外の大学や部局間との交流協定も積極的に締結している。

外国人留学生の留学にも力を入れており、研究生、交換留学、研修留学生（国費）、学部や大学院への留学生受け入れも行っている。外国人留学生は、アジア地域を中心に 173 人である（中国から 94 名）。

学部学生は、4587 人（うち女性 1828 人）、大学院は 815 人（うち女性 212 人）。教職員数は 714 人（付属学校などを含む）である。（以上 2022 年 5 月現在）

現在の学長は小川智氏である。筑波大学第一学群自然科学類卒、同大学院理工学研究科修士課程修了。筑波大学文部技官、同化学系助手をへて、1992 年から岩手大学工学部助手、講師、助教授、2006 年から同工学部教授、大学評議員、理事・副学長を経て、2020 年 4 月から学長。専門は有機元素化学、有機材料化学である。

文：滝川 進
写真：岩手大学 HP